36

高見　順
阿部知二

新潮社版

日本文学全集 36

高見　順
阿部知二

発行／1967年9月15日　十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／二光印刷株式会社　製本所／大口製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1967

目次

高見　順

起　承　転　々　五

嗚呼いやなことだ　二三

虚　　実　四九

如何なる星の下に　六九

湿原植物群落　二二五

女たらし　二七一

阿部知二
冬の宿　二八三
人工庭園　四二三
アルト・ハイデルベルヒ　四八一
注解　四九三
年譜　五〇七
解説　奥野健男　五二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

高見順

起承転々*

事の起りは、すなわち、冷い飲物が漸く温い飲物に取って代ろうとして、見渡したところ、どうやら彼此平均を保っている初夏の夕まぐれ、神田の某喫茶店に佐伯と雅子が坐っていたすぐ側の丸テーブルに、印南を含めて三人の大学生が偶然、席を取ったのに始まる。

いや、偶然かどうか、襟にMとついているから三人とも医科大学生であろうが、教室ではきっと座席を選ぶのに行き当りばったり、足の赴いた所に腰をおろすであろう彼等もここでは入った瞬間、期せずして三人の眼が二十歳を一つか二つしか越えてないと見られる雅子の美しい横顔を認めると、一路その方へと進んで行った。踵に鋲を打った靴一足とゴムを付けた靴二足と。その鋲の靴は、印南の身体に似合わず小さい足を納めていて、表面は補綴を持っているにも拘らず靴墨と布とで丹念に磨かれてあるのは、切り詰めた生活のなかから、寡婦の母親が一人息子の身のまわり万端を、毎朝の靴みがきに至るまで世話している事実を物語っていた。若い息子はそういう母親の愛情にいわれなく嫌悪を抱くのが常であって、硝子に張りつけて皺伸ししたカラーを、宛かも仕上げの下手なそれを頸につけていると自家のつましさを覗かれるみたいで家を出るとすぐ腹立たしげに取り外し、ポケットにねじこむのだったが、今、彼は煙草を取り出そうとしてカラーが手に纏って来、あわてて突き込むと、羞渋風に歪めた顔をかたえの二人の学生に見せた。二人の学生はそれを、女一人かと思ったら飛んでもないオヤジがついている、いやはやという興ざめの苦笑と解し、しかし印南はそれも含めたには違いなかった。

父親かな？——四十を過ぎていると見られる佐伯を学生の一人がそう言うと、娘である訳の雅子が爪に真赤な化粧を施した指のさきに、どうも嗅ぎなれない、だから高い舶来のに違いない煙草を巧みに挟んでテーブルに肘をついた儘、薄いけれど格好のいい唇を煙草の方へ持っていっては、あだかも煙を佐伯の頭に吹き

かけるみたいに、プーッと吹き上げている傲慢無礼の有様を、丁度正面から見まいとしても見られる位置に坐った、もう一人の学生が――うんにゃ、娘ではない、断じてないと力んだ。父親でなくなった中年の男は、派手というよりは気障な縦縞の洋服を着込みマドロス・パイプを分厚い唇に伊達者風に銜えていたが、猪首で猫背の傾きがあり、印度と緯名のある印南よりまだ黒い顔は不愉快な肉塊のような大きな赤鼻がさらでだに雑作の整わぬ所を致命的にぶちこわしてい、鼻翼から頬にかけて痘痕のような穴までが散在している始末と相俟って、その装いをすこしもイタにつかないことにしていた。総じて気障ッぽいという事は、反感を唆る事を意味するのが普通だが、この男のは妻の悪趣味なり或は環境の勢力なりに、そう強いられていると、見た眼におもわせる、悲しげというか、滑稽というか、そんなような所が、すくなくとも彼が口を閉じている限りに於いては、有った。

これに反して、彼の前にいる、彼の娘でないことだけは決断された女とときたら、美しさがどうしても必要とするある程度の驕慢をはるかに乗り越えたものを、さすが女に甘い学生達の眼にすら与えずにはおかなかった。男の不格好に比して、女の洋装がいかにもピタリと身にあい、その型も一見平凡なようで、自分の姿態の美しさを一番出すよう自ら考案したらしい独特のもので、帽子、靴ともに茶の一色で統一した、ケチのつけようのない有様は寧ろ憎らしいほどであった。

そういう二人を学生達は、父娘でないとすると一体なんだろうと、医科の学生らしい独逸語であれこれと頗る無遠慮に推定し合った。独逸語は不得手の筆者がなかなか興味あるその会話をここへ書くことの出来ぬのは甚だ遺憾であるが、問題の男、佐伯が生憎と独逸語をいくらか解したという事は、尚更遺憾であった。彼は雅子に対して自分の博学をそうして誇ろうとするかの様な態度で、学生達に向い、諸君は独逸語を以てかたるならば分らない積りらしいが、私は諸君の論争をことごとく理解し能うのです　いけませんよと言うようなことを独逸語半分、日本語半分で言った。彼が独逸語を知っているのは欧州航路の汽船の事務長をやった為であったが、その経験は未知のものに厚顔の感じでなく話し掛けて行って、このような稍ともすると

非難めく言葉も、丁度、薬に糖衣をかぶせるように諧謔を以って表面を蔽うことのできるコツを与えたらしい。

学生達はとんと恐縮してしまい、佐伯は満足そうに首を小刻みに振り、振りおわると、どうです、諸君、みんなで銀座へでも飲みに行きませんかと、息が鼻から洩れる明瞭でない発音で言った。——こうして結ばれた印南と佐伯達との交際が、印南をやがてどんなに苦しめることに成ったか。遺憾と言った所以である。

五人——即ち、佐伯、雅子、印南、他学生二人は間もなく自動車に同乗し、学生達はもうはしゃいでいた。学生達は顔を合わせると、おい、なにかいいことないかと絶えず問い合せる、そのいいことに今や正しく遭遇した感じであり、佐伯も彼等の有頂天に大体近い面持であったが、雅子ひとりはツンとして、拗ねた態度だった。——佐伯が行こう、行こうと半ば強制的に学生をいざない、喫茶店の椅子を既に立ち上った時も、彼女はそういう佐伯を見苦しいという風に、安っぽいオフセット版の絵が壁にかけられてあるのに、付睫毛を施したらしい眼を向けていたりした。印南等は事の唐突に大体がおどろいたのは勿論、そうした彼女の様子にも気を兼ね、躊躇していると、相手はそれと察して、いいんだよ、いいんだよとヤケのような声を出した。その癖、じゃア、ということに成り、兵隊みたいに印南達が起立すると、佐伯はあらためて彼女に向って、一緒に行きましょうと印南の格別の注意を惹いた愛情の籠った丁寧な語調でそう言い、そしてそれは言ってしまうと花でもうっちゃった顔付で、前屈みの身体を冷淡にドンドン外へ運び、彼女はやおら腰をあげると、これも亦茶系統のハンドバッグを不貞腐れたように指のさきにぶらさげ、持ち前かもしれないが稍怒った肩を前後に振り立てゆっくり足を出す度に、ぶらんぶらんと身体のまえうしろに持って行き、そうした反抗を示したところで所詮従わなくてはならないという風の愁いの漂った、案外に優しい眼であった。

——

車のなかで名刺の交換がはじまった。さア　彼女の身分がわかるぞと期待していた印南に、太平鉛管株式会社専務佐伯兵衛という大型の名刺を出した佐伯が、ツンと出した自分の鼻の先を見ているような顔付の彼

女に、あれは――と、大きな赤鼻を向けつつ、あれは、いもうと、妹です、よろしく――あっけなく言った。毒気を抜かれたみたいに、はアと首を下げた。なにぶん狭いので首を縮めたという方がほんとかもしれない印南はじめ他の学生の誰にいうともなく、佐伯がすぐと、僕の同窓でS―というのが、内科の医局にいた筈だが知らないかしらと言い、生憎誰もそんな名は聞いたことがないのは、佐伯が皆の注意を謂う所の妹からそらそうとする仕掛けの感じを深めた。

印南は母親育ちの気の弱さで、佐伯のくれた名刺に、やりどころのない眼を落していた。そこで読者の親切な眼も印南と共に、その名刺の上にそそいでもらい度いとおもう。というのは、それから自動車が銀座へ行きつく迄の時間を利用して、名刺の敷衍を致し度いからである。

佐伯兵衛が名刺の現在の肩書を得る迄の前の職業は、前述の汽船事務長であったが、彼が現在の妻を得たのは事務長時代で、彼が現在の地位を得たのは、大半は、妻のおかげであった。言い換えれば、独逸大使館に勤めていた外交官の夫をうしなったばかりの頗る富裕な、しかしあまり美人とすることのできない当時三十二歳の一婦人が日本へ戻るのに選んだ船に、これまた妻をうしなって一年目の彼が事務長をして居た。その婦人が日本へ上陸すると、正式に彼の妻となり、妻と職業とを取りかえっこするみたいに、彼は事務長をやめさせられたが、この交換は比較にならぬほど彼に得なものであったので、汽船時代の友人は今もってこの話になると、奴め、うまいことをしやがったと、うまいというよりひどいというのにちかい下品な憶測をするのだった。

しかし、それは憎ったらしい印象を与える彼の風貌が何割か手伝う評判であって、醜悪な肉体には案外しおらしい魂がひそんでいる例に、彼が或はならないともかぎらないと人に思わせることを彼自身は言っていた。即ち誘惑したのは彼でなくて、その時、喪章を付けていた女の方であり、クリスチャンの自分が喪章を眼の前にしてどうしてみずから姦淫の罪を犯し得ようか、今でもそのときを想起するとゾッとし、自分の妻が年甲斐もなく家庭をちっとも顧みない有閑夫人の振舞を逞しくしているのをじッとこらえているのも、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

のときの罪の報いと自分はかんがえているからであると言い、眼縁の爛れたような濁った眼の表面を、思いなしか忍従の涙のごときもので濡らすのであった。一方、彼の妻に言わせれば、彼と一緒になってからメキメキと贅肉を蓄えて行ったそのからだを――彼女がああなただから肚を割って言う話だがということを相手に示そうとするときの、これは癖の科だが――身体を前に投げ出すような格好を、ほんとにとか、まあとか言い乍ら二三度示したのち――あれは顔も心も悪魔でございますわ、わたくしは悪魔に取り憑かれた不幸な女で御座いますわとこう言う。翻訳芝居の台詞のようなことを取り澄して言う、その言い方は、ほんとと思わせないところがあり、乱行の言訳だろうと取れもした。

一説には、二人が結婚したのは、彼女が妊娠したためであったが、一種の病毒のせいで結婚すると間もなく流産したといい、以来、二人には今日まで子供がない。その病毒は、それが頭にきて客死したといわれている彼女の先夫が彼女に残して行ったものとする説と、妻をうしなってから世界の港々で遊び痴れていた佐伯のものとする説と、両方あったが、筆者にはいずれとも分らない。筆者の知っていることは、佐伯が彼女の実家である某多額納税者の一族を背景に、グングンと社会的地位を得て行ったこと丈けである。そして佐伯の妻がいつぞやのダンス・ホールの有閑マダム狩りに引っ掛った一人である事は、筆者のその方面の友人から聞いたことがあり、佐伯も……いや、佐伯の話はこれからいやでも出てくる訳であった。

いやどうも、実に愉快な夜であった！　つい先刻迄はお互に路傍の人々であったのが、今は肩を叩き手を握り盃を挙げて、歓を尽しているのである。

――雅子までが、ボクも飲もうと言った。ここは行きつけの酒場と見え、女給がすぐと、じゃいつもの持って来ましょうねと愛想よく立った。酒場へ男客と来る女は兎角、突慳貪に扱われるものだが、雅子は不思議に愛されているらしい女給達の眼付と言葉であった。

そのジン・フィズを雅子は唇をとがらせた可愛い飲みかたで、けれど慣れた風にぐいとやった。佐伯はこの酒場に瓶ごと買って預けてあるオールド・パーを

生で、学生達はハイボールにして飲んだ。その赤鼻はどうやら強烈な酒精のためらしい佐伯がつよいのは当りまえとして、雅子がその子供子供した顔容に似ずその顔になかなか酔いを出さないのは、それに比べて忽ち真赤になって了った学生達のおどろいたところであった。なかにも一番性急に酔いを発した印南は、あながち酔眼のせいばかりでなく、はじめ好感の持てなかった雅子が、今は傲った風をすっかりなくし、顔だけでなく言葉の言回し、身のこなしまでが子供子供して愛らしく成り、そして男達の会話の間にひょいひょいと挿む機智に富んだ警句はいかにもその高い教養をあらわしており、真のモダン・ガールとはこういう女のことかと世にも蠱惑的に映って来たのに、喜色がおのずから彼の端麗な眉宇に上ったのであった。その眼差を、雅子は慣れた敏感さで感じ、そして相手の心を温かに包むような微笑を以ってそれを受取ると、いつ御卒業？　と言った。印南は幾分あわてた口調で、来年春ですと答え、つづいて二人の間に、言うそばから忘れてしまう種類の会話が取りかわされたが、印南は全く楽しかった。

然し、それは兄なる人の、冗談としては不謹慎すぎる、ようシンネコだねといった弥次で中断されねばならなかった。勿論、彼女も負けてはいないぞというのをその口許にあらわして、ボク、印南君と恋愛しそうだと駄々児のような調子で言い、握手のつもりらしく、スッと差し延べた手が卓上のグラスに触れた。ヤンヤと喝采する学生達の、佐伯は寧ろ音頭をとる勢いで、や――凄いぞ、凄いぞと叫び、それに雅子はいさかも痿む気色なく、睨むような一瞥を佐伯に与えると、ハンドバッグから刺繍を施したハンカチを取り出してテーブルのよごれを拭こうとする。印南はそれを遮って、ポケットからゴワゴワした長いものを撮み出し、素速く卓をふいたが、これは例のカラーなのであった。

――かねて伝え聞いてはいたものの、所謂ブルジョア階級のモダンさが、こうも端倪す可からざるものとは思いも寄らず、印南はつつましやかな我が身、我が家にくらべて、憧れのようなものが、その眼に浮び出てくるのであった。

十二時ちかくまで、こうして遊んだ。

酒場の前で自動車に乗りこむ佐伯と雅子に、正体の殆んどなくなった学生達は挙手の礼をして、モダン兄弟万歳を三唱し、しかし印南は、さあ帰るとなると雅子がふッと冷酷な顔になり、別れの言葉ひとつかけてくれなかったので、その声が低かった。そして佗しげな首を傾げて目送していると、自動車はすこし行ってからギイととまり、インドさアんと、親しげに印南の綽名を呼ぶ雅子の甘ったるい声だ。返事もできないで飛びついて行った印度色の印南の顔を、雅子は幾分悪戯気も窺われるがしかし全体としては親愛に溢れた眼付で打ち眺めながら、次の日曜日に一緒に奥多摩へドライヴにいかないかと言う。一も二もない印南の返事に、自動車は再び動きだし――それは佐伯の名刺にあった自宅・大森区山王一丁目三〇六の方へは行かず、木挽町の方面へと消え去ったのであるが、勿論、印南の与り知らぬところである。

奥多摩の清遊が印南にとってどんなに楽しいものであったか、その区々たる描写は残念乍ら省略せねばなるまい。何故なら、佐伯、雅子、印南、この三人づれの遊楽はその後殆んど毎週欠かすことなく行われ、この恵まれた若者の愉しさは弥益す一方、誠に頂点を知らぬ有様であった。ためしに、ひとつを描いて他を犠牲にするのは片手落ちの謗りを免れぬであろうし、みんな書き立てて行ったらそれこそきりがない。

とかくするうちに、幸福に馴れた若者の胸に、ひとつの不平が湧いて来た。そのあたりが、さきに言った頂点に当るかもしれない。すなわち、彼は雅子と二人だけで遊ぶ機会を持ち度く成った。学生等のなかから特に自分のみ選ばれ、そのため友情を危くした。それを考えると、そう言いだして宜しいと頷ける大胆さが次第に養われて行った。

佐伯が座を立ったとき、彼は勇を鼓して遂に言った。夏の終り近く、相南の海に遊んだ日のことである。――

そして彼の得たのは、鼻さきでふんと笑う、蔑むともとれれば咎めるともとれる微笑だけであった。そのまま彼女は籐椅子から黙って静かに立ちあがると、そこから暮色の罩めた海面が一望の下に眺められるヴェランダの手摺に、身を支える様に手をついて、ずっ

と遠くに眼を放った。たちまち項垂れてしまった頭の中で、彼は今のは求愛の意味ではないのだからという陳謝の言葉を、あれこれと探しているうち、あの瞬間、彼女の顔のどこかしらに一抹の哀愁がたしかに横切ったと気付いた。はてと、彼は首を擡げると、外気の余映に照らしだされた彼女の横顔は苦痛でかたくこわばっているもののごとくであったが、そのとき、室内の電気がパッとついた。踊ろッとな。——彼女は子供みたいに言うともう靴をバタバタいわせ、印南クンが踊れるとボクとてもいいんだがなア。つい今までと、まるで違った女のようになり、丁度そこへ戻ってきた佐伯の胸に猫のように飛びつくと、ネ、ネ、踊りましょうよと、佐伯も眼を張る嬌声を発した。——

もはや印南はなんとも遣瀬ない恋の虜と成ってしまった。彼は自分の容貌にひそかな自信をもち、それも無理からぬ見事に整った眼鼻立ちのうち殊に澄んだその眼は魅力が深く、黒い皮膚もモダン娘の好みに適うものと恃んでいた。しかし彼が雅子に対する恋愛の仕方のうちに、自分から愛を告げようとせず女の方に先ず言わせようとする風の見られたのを、色男気取りの驕傲とするのは印南に酷であったろう。いや、それどころか、母親育ちの女々しさは、雅子の一顰一笑に、ああでもない、こうでもないと目がまわるほど曳摺り回される始末、求愛の確信がトンと得られぬ有様を呼んでいた。まずもって、必要なのは、どうあっても二人きりの機会を持つことだと、それ丈けが明瞭にわかる感じであった。

かくて、彼は眼をつぶってぶつかって行く想いで、ふたたびそう言った所、勢いのすさまじさに固い扉もこわれてしまったような怯えた微笑で何の雑作もなく、このたびは承諾した。木挽町の□□アパートにS—という洋裁の先生がいて、そこへ昼間習いに行っているから電話をかけて頂戴という返事だ。毎日ですかと言うと、ちょっと言い淀んで、火曜日と木曜日——と、出鱈目をいうみたいな顔付をして、何故かチッと舌を出した。そこへ電話して佐伯さんいますかと言えばいいんですね。——アラ、佐伯じゃなくて、春日よ。——え？　なんですッて、もう一遍、あんたは佐伯さんの妹さんじゃないんですか。そう言うと、雅子は見るみる赧くなり、印南はあわてて——ああ、奥さんの

妹さんですか、なんだ、今まで随分おつきあいしていて、ちっとも気がつかなかった。――いやアだわ。そう叫ぶと、雅子は娼婦のような手付で印南の肩をポンと叩き――あんなグロテスクなのの妹だナンテ、まあ嫌！　そして独りでクックと笑い、どうしたんですと印南が訝るほど、いつ迄も笑い続けて居た。

印南はすっかり朗らかになり、この前はどうして、あんな不思議な態度をとったのかと責めるように言った。この前ッて？　と彼女は遠慌けてから――兄がとッてもやかましいんですもの。

恋の奴の可憐しさは、兄妹打揃ってバーへ出入したり、何処の馬の骨か分らぬ学生を巷の喫茶店から拾って遊び相手にしたりする、そんなルーズさとまるでいらいらはらのこの言葉を真に受けた。悍馬みたいな反面には、矢張りそんな嗜み深いところがあるんだなと、女優と紛う化粧を施した彼女の顔に、切ない愛慕の瞳を彼は注いだ。――女優といえば、雅子は女優になりたいのだが、兄がどうしても許してくれないのだと、印南にチラと言ったことがある。

以上を承けて、ここに印南の母が登場してくる。

寡婦暮しのせいか歳より若く見えるその顔に、秋の陽が正面から照りつける昼さがり、大きな菓子折を左手に支えて、大森の佐伯邸に案内を乞うている彼女の姿が見られた。

やがて応接間へと導かれる可く、女中のうしろに鞠躬如として足を進めている彼女が、その廊下に見出された。

応接間で彼女はおそろしくながく待たされた。その時間は、大胆な決意で引釣ったような彼女の顔のとげとげの線を漸次やわらげ、やがては嫁の実家となる（――と、彼女が思い込んだ。）この佐伯邸の応接間を、中老の女の貪婪な眼付でジロジロと観察する余裕を与えた。そこには、印南の家などでは見ることのできない金目のかかった物品があまた置き並べてあったが、邸の主人なり主婦なりの執方かの趣味でそれらが統一せられて初めて醸し出す高雅な趣きのごときは微塵も無かった。ただゴタゴタとして、言ってみれば、主人と主婦の余り洗練されない好みをそれぞれあらわした物品どもが勢力争いをしているかのようであった。ここから硝子窓を通して眺められる庭が、時期時

期に無愛想な植木屋の手がはいるだけで、外出勝ちの主婦や主人から、ちっとも愛せられていない寂寞を見る人の眼にすぐと訴えるのと丁度同じものを、この応接間も漂わしていた。然し、これは印南の母の、欲に眩んだ眼に果して映ったかどうか。彼女はひとつの肘掛椅子から腰をあげると、他の椅子へ移り、スプリングの具合をためすみたいな格好をした。それは、間もなくこうした調度を楽しめるという窮かな幸福に酔っての所作と見られた。

彼女の訪問の目的は、既に読者に明らかなように、雅子を伴の嫁にと申出ることであったが、それは一も二もなく承諾せられる事と、この幸福な母は信じていた。彼女はその独り息子の印南が中学二年生の時、市役所に出ていたかねて脆弱の夫を失い、とぼしいながら種々の手内職までして伴を大学に迄学ばせた。医科を選んだのは、お医者さまは一番金儲けがいいから、それにおしという彼女の指図に印南が従ったので、彼女は只管息子のためという顔をしながら、息子によって彼女が慰められているに近く、それに必要な伴の従順を、万事につけて幼い時分から躾けてあった。佐伯兄妹と知合いになり、その御馳走に絶えずなり、五円十円という小遣まで佐伯がくれるという話を伴から洩らされると、何故かその話に触れるのをいやがる伴を壁にまでぐいぐいと押しつけて行く勢いで、彼女は事の様子を仔細に絞り出した。伴をゆくゆく妹の夫にと見込んでのことで無ければ、どうして小遣まで呉れる訳があろう。彼女は酩酊したような気分でそう思い、そんなお金持ちの眼にかけられるように成ったというのも、伴の躾けがいいせいだと、自分の自慢に成った。

そこで伴の気持はどうだろうと、それとなく探ると、彼はあんなモダン・ガールを嫁さんにしたら始末が悪いですよ、お母さん、とほんとにそう思っているような眉の寄せ方であった。それもそうだねと考え直す風を装うと、彼は、僕はまあいいけど、お母さんが困ると思うんだ。——そして、そんな話はもうよしましょうとソソクサと腰をあげた。それを母親は狡るそうな上眼越しで見送り、手ばかりは不思議に若い女のように脂肪があってしなやかなのを帯の間に挾むと、何やら一言二言つぶやいて独りで頷いた。——印南が雅子と知り合った当初のことである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong